WASON
HQ
1104
J74+

Oct. 25
1885
no. 7

驛遞局認可
明治十八年十月二十五日發行

女學雜誌

第七號

東京萬春堂

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

夏雨（なつのあめ）　昨日（きのふ）みしつゝれの花（はな）は實（み）になりて片山（かたやま）はたに雨（あめ）注（そゝ）ぐなり　柳原愛子

●女學雜誌第七號目次

宮内省達、華族女學校規則●乳のます母親の心得（一）●雜報數件●イーストレーキ夫人の演說●和歌、夕立外一首、發句、秋月外一首、詩、秋日江村●晏子の御者妻の諫を入れさる事、靜御前の舞附圖基督道德の歌、ゑを書く心得數章、娘と姬の辨、五常の程●女房どもの風俗、歌澤家の發起、常磐津節の起原●源氏物語の評、神童秀才の話、婦女子の心得、泥中の蓮花、小紫、吉野、昔しの嫁入り●鶴龜松竹梅の荅、觀月の問、女學者の問●諸報告數件

十月二十五日

明治十八年間　女學雜誌發兌日表

月		
七月	廿日	
八月	十日	二十五日
九月	十日	二十五日
十月	十日	二十五日
十一月	十日	二十五日
十二月	十日	二十五日

廣告正價表

一行一回揭出	但廿三字詰	前金五錢
同　三回以上	同	同一割引
同　六回以上	同	同二割引

報告

當分毎月二回の發行と定むると雖ども事業の整頓するに隨ひ漸次回數を增加して毎週一回の發行とすべし●本誌は必ず前金を要するを以て御注文の節は代價郵稅共御送付を乞ふ●郵便切手代用は堅く御斷り申上候但之不得已者に限り郵便切手一割增にて申受候●爲替は東京芝區新橋郵便局へ向け御振込被下其爲替券を弊堂に御送付可被下候●詩文和歌發句等の原稿御投寄の節は作者の國郡町村姓名等明細に御記入可被下候

女學雜誌代價郵稅表

一冊	正價四錢	郵稅一錢	合計	現金五錢
十冊	同卅八錢	同十錢	合計	前金四拾八錢
廿冊	同七拾錢	同廿錢	合計	前金九拾錢
卅冊	同壹圓	同卅錢	合計	前金壹圓卅錢

但之毎號十冊以上づゝ取纏めて御購求被下候方へは賣捌所同樣特別割引可仕候

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第七號　（明治十八年十月廿五日）

○宮內省華族女學校規則（第五號のつゞき）

●第七條　下等小學科の課目ハ修身、讀書（作文を含有す）、算術（四則に終る）、實物（地理學並に有形理學の豫習を主とす）、裁縫、禮式、習字、圖畫、音樂、體操の十課とす●第八條　上等小學科の課目ハ修身、讀書（同前）、算術（分數法並ニ小數諸等に終る）、地理（自然及び法制）、本邦歷史、物理、博物（動植礦及び人身を含有ス）、裁縫、禮式、習字、圖畫、音樂、體操の十三科とす●第九條　中學科程ハ稍高等なる普通學科を完具シ且本校教習の主旨を大成する者とす●第十條　初等中學科の課目ハ修身、和文學（讀書作文を含有す）、漢文學（讀書而已）、歐語學（談話を主とす）、算術（比例以外）、地理（自然及び法制）、物理（附天文説）、化學（無機體附有機畧説）、礦物（附地質畧説）、裁縫、禮式、習字、圖畫、音樂、體操、の十五課とす●第十一條　高等中學科ハ科目ハ修身、和文學、（同前）歐語學（同前）、代數（一次方程式、二次方程式、高次方程式）、幾何（平面立體）、歷史（和漢洋）、生理（附解剖及び養生）、動物、植物、教育（附心理説）、家政（附治財學）、裁縫、禮式、圖畫、音樂、體操、の十六課とす●第十二條　中小學科每週授業時間表ハ左の如し

（時間表ハ畧す）

（以下次號）

○乳のます母親の心得（一）　南石外史

日本の人種を改良して其の身体と靈心とに於て共に歐米の人と拮抗し得べきやうならせんと欲せバ先づ向后子女を出產すべき婦女を改良して所謂る其の元を正さゞる可らず日本の婦女かくてあらんには此れより强壯活潑の子女を得んと望むと猶は瘠地に豐作を望み砂礫に青草を欲すると一樣の愚なるべし因て本誌ニハいろ〳〵と其の改良法を講究あるに付きて余ハ今まだゞ其の一事と茲ニ注意し世の人の余り

に心掛けざる所ろ反て是れ非常の關係あるとを知らすべし

時事新報及び其他の新聞にて日本婦人の事を論ぜるとき常に言ふやうは婦人かく壓制を受けて胎内の子をよく發達せしめざれバ生れ出でたる子女の完全ならんと固より望むべきに非ずと云へり是れ固より當然の事なれども更に一の大なる理由ありて日本子女の十分に發達せざるとあり其ハ子が胎内に在る間の關係にはあらずして既に出產したる后ち母親より受る所の乳汁の事なり凡そ世いよ〳〵開けて文明更に進まバ彼の下等動物の如く母親が子女に乳を呑ますと云へる如きことは全く滅して牛乳羊乳なんどを之に代用すべきと今日西洋に於て多く行はるゝ如きに至るべしとは云へども之を我日本の現今に望まんは空しき譯なるべし然れバ母親たるもの能々注意して其の乳汁の尤も宜しき者と出し之をその子女に呑ます樣の覺悟あると專一なり若し母親の覺悟此に至らざ母親を待する夫の注意亦た茲に至らずんバ甚しき時なハ子女直に死するに至るべく甚しからざるも子女ハ病ありゝる迄となるべく此れより日本人種を敗亘せんなどゝ云へるとハ到底望む可らざる事となるべし

今ま此の理由を略示する前に生理のあらましを說置んに人体ハ恰も數千万の線を引渡じたる糸環の如し如何なる動作を爲すにも皆な此の線なるものを使ふとなり然るに茲に感動神經と云へる一種の神經線ありて体内の處々に行き渡れるがいろ〳〵の官能あるうちにも涙、唾、乳なんど云へる分泌物を出すには此の神經尤も強く關係する處ろありて且つ感情の爲に其の神經の感動さるゝとハ眞に驚くべき程の事あり悲しと思へバ直に涙が出で怨まんと思へバ直に涙流れ耻ぢらふ時は直ちに顔を赤め驚くときは直ちに面を青

くし食物を見れバ直に唾を出し恐るゝときは直ぉ唾を止むるなんど其の關係の速かなるハ間に髪の毛一本の隔りもあき程なり茲に面白き話と云ふは印度にて家内よ何物かを失ひて其盜人を明ぉせんと思ふとき若し家内の人々に疑わるときは各々の口中に米を含ませて暫時の后ち之を取出で撿見し濕ひの薄き者ハ心に恐れて口中乾き唾なかりしゆゑと判斷して之を責め問ふに大抵は當らずとも遠からざる裁決を得ると云へり斯れバ彼の分泌物の一つたる乳汁の如きに至りてハ特に此の關係の密切にして母親の心に思ふ次第に随ひ出す所の乳汁よ大なる變化を生ずると云へり

アストレー、クーパーと云へる學者の說ぉ據れバ母親の乳汁ハ心情靜かにして思念平ぉなるとき尤も多く出でゝ且ッ其の質も子女によく適すべしと云へども若し然らずして心情さわぎ思念亂るゝときハ思ひも寧らざる非常の害甚ぶ多かり先づ其の大体を云へんに母親の心常に腹立ち易きときハ乳汁の量も減じ其質ハ甚だ薄く且つ水氣多くなりて子女の腸を痛め之をして大腸熱及び腹痛を起さしむるとあり又もし母親の心怒氣を帶てあらんときハ乳汁の質焮衝を起さすべきものとなりて子女の腹を痛ませ下痢を起さしむるとあり又た若し母親の心憂鬱してあらんときハ乳汁の出高大に減じ時としてハ全く絶えて子女を養ふあたハざるとあり又た若し母親の心心配に滿てあらんときハ乳汁の出高減じ其質亦た大に悪しくなるべしされバ子女の病にかゝれるときハ母親心配して其の乳汁を減じ子女をして更に苦しますと有り勝ちの事あり又た母親の心もし恐懼を懷くときハ乳汁全く止まるとあり下等社會にて夫亂暴し酒醉の怒りなんどを發するときハ妻の胸直ぉ結塊を生じて焮衝を起し久しからずんは乳汁を出すとならざるべし

と云へり
母親の心持と乳汁との關係ハかくまでに密切なるものなり然れども此れ等ハ事の尙ほ恐れ少きものなり若し一層母親をして心念を亂らしするに於てハ其の乳汁を呑ます所の子女をして直に死するに至らしむべしかゝる例ハ東西に甚だ多きとあれども今ま其の証據として尤も著明の實事三四條を掲げかゝる事に注意せざる世の婦人等をいましめ次にハ亂暴なる世のあらくれ男等を責めんとす

●任ぜらる　小池道子君ハ本月十日權掌侍に女嬬山口益子君ハ同十一日權命婦に何れも任ぜらる
權命婦に任ぜられ其翌日死去せられたる右山口益子君の履歴を聞くに同君ハ京都府士族原功氏の伯母にして天保十年に召出され喜永四年に末の衆御雇仰付られ万延元年末の衆仰付られ明治四年女嬬に任ぜられ今十八年十月に至りて權命婦に任ぜられ齡五十七にて　仁孝　孝明　今上三帝の宮中に任へ奉られし由

●渡邊府伯の夫人　此程も此の事ありとか渡邊府知事の令閨てい子君ハ神田和泉町の養育院へ參られ同院木下事務長に案内を乞はれ貧民の狀態を親しく訪はれ男女室を始め病室且幼童の教場幷に工場各室等と巡覽されしが殊に病室に在りし患者を一人毎に病狀を尋ね其不潔なるをも厭とはず幼童を愛撫して懇切に見舞られしかバ病者ハ合掌して涙にむせび幼兒ハ宛も嬉しき氣に慕ひ馴るゝの狀なりしと巡覽の後ち病者へハ鰹節數百本梅干數樽を又幼童へハ半紙十帖を賞其他へも品物を寄附して歸邸されたるよし了得に府民を牧さるゝ長官の夫人ありと入院者ハ落涙なして難有き思ひをなせりとぞ左もあるべし

●昔談會　神田今川小路一丁目に住む士族奥村何某の母銀子(六十三)ハ思ひ立にて毎月二回づゝ昔談會

といへるを開き新造にまれ年増にまれ心あらん女子を打集へて和歌、俳諧をはじめ花、茶、碁、將棊なんどの慰みを催ほし女子同士の交りを厚うせんと頻りに奔走し居る由

●褒賞　茨城縣下下總國北相馬郡長沖村平民阿曾おことハ同國南相馬郡古戸村の農平馬の長女にて天保十一年同郡長沖村飯塚松五郎に嫁ぎ一男二女を擧ぐ文久三年十月其の夫病歿す時におこと年三十七堅く操を守り能く其の遺孤を教養し又他人の孤子を貰ひ之を愛育し其の成長を待て他に緣付たるもの凡そ二十六人又た近隣の兒女を集めて算筆およひ針繡を教へ其の薫陶を受けたるもの殆んど三百名明治十二年不幸にして長男淸二郎病死し二孫猶幼なりおこと一身百事を負荷し之れを教ふるに義方あり而して舅姑に事ふる二十餘年一日の如くしかのみならず貧民を憐れみ鰥寡孤獨を恤ひ其の庇に因りて生活を補ふもの頗る多し明治十四年長興學校假塲破れて之がため生徒の健康を害し教授の不便を來すこと少からずおこと聯合村の人に圖り新舍を改築せんと欲し率先若干金を抛ち且つ二孫に命じて敷地材木萱茅等を寄附せしめ又他人を勸めて許多の金を寄附せしめ終に之を改築するを得たり其行爲洵に奇特なるにより去年十二月十九日賞勳局に於て左の通り賞與有けり

茨城縣下下總國北相馬郡長沖村　阿曾おこと

資性順良能く舅姑に事へ文久三年の頃ろ夫病歿す爾來堅く貞操を守り且つ慈善の心厚く他人の孤兒を收養し成長の後之を嫁娶せしむるもの二十六人の多きに至り又多額の金錢を捐て有志を募り長興小學校舍を建築する等其成績著明なりとす依て明治十四年十二月七日　勅定の藍綬褒賞を賜ひ其善行を表彰す

茨城縣下下總國北相馬郡長沖村　阿曾こと

本村長興小學校建築費として金五百八十圓餘寄附候段奇特に付き銀杯一箇下賜候事

（本年十月十二日官報）

●歐洲諸國婦人の學士　今を去る十五年前より瑞典の諸大學にては婦人に入學を許し爾來入學試驗を經過せし少婦の數は六十人の上に出で尚はいよ〳〵女學生徒並に卒業生徒增加するの模樣あり那威國にては五年前下議院の決議によりて女子に大學入校を許すことになりたり嗹國コーペンヘーゲンの大學にては十年前に始めて女子の入學を許し昨年五月には十一人の婦人生徒ありし露國にては首府を初めとしモスコー府キーフ其他の都會にある婦人の修學を許せり尤も露京にて婦人學科を設けしは今より七年前の事にして始めて卒業試驗を經過せしは今より三年前の事なり此時文學史學科に九十九人理學科に六十四人の婦人學位を占得しより毎年女生徒の數は一千人の多きに及び當時高等學科を修むる婦人の數三百二人設立以來名簿に上りしは九百五人其內五百八十人は數理學物理學を修業したり白耳義國ブラッセル府の大學には五年前に女子始めて入校し三年前に政府女子の大學入校を認可し昨年に及びていよ〳〵一般に女子の入學行はるゝに至れり瑞西國にては獨逸人種の地方に最も婦人の生徒多く羅馬教徒の地方には少なし生徒は多く露國人にて中には米國婦人もある由なり伊太利にても今は婦人禁學の法律なく去る頃一の露國婦人ピザの大學にてドクトルの學位試驗を經過し當時該地にて醫を開業して盛んに行はるゝが故伊國婦人も其例に從ふもの多しといふ西班牙國にては一千八百八十一年より翌二年に至る學業年間に大學の講議に陪せし婦人十二人ありて女子入學の風習年一年より盛なりとぞ獨逸國の大學も諸學科に婦人の加入を許せる處ありて去る頃一の露國婦人ライプ

ナックの神學講議に陪せり殊に佛國ハ近時婦人の學問を奬勵すること歐洲第一とも云ふべく今を去る廿一年前より一昨々年に至る迄學位を授與せし數百九人に及び去る二年間に尚ほ其數を加へたり當時パリーの醫學部に廿五人の生徒あり又た婦人中學校の設立今ハ充分に行れてある故に將來婦人の大學を希望する者いよ〳〵多かるべしと本年本月九日の基督敎新聞に見えたり

●異の女丈夫　亞非利加の某部落に於てハ女子を以て常備兵隊を組成するとハ兼て聞きつるが印度に於ても斯る女丈夫の存在せる國ある者と見えマラッタ部落の女主某氏ハ前日亞非汗事件に際し書を印度總督に上りて曰らくマラッカの女子が騎射を能くし善く戰ふなとも既に閣下の知悉する所なり妾も何時よても女軍一隊を繰出す可けれど閣下希くは妾の願意を許諾し英國印度の女子をして男女戰に向ひて更に優劣なしとの先例を示さしめんことを云々

(本年十月九日ジヤパン、ヘラルド)

●今一ッ印度のお話　印度國にてハ不幸にして早く其の良人を失ひし寡婦ハ前世の悪業の致す所なりとて親類一同之を天罰なりとて少しも搆ひつけず且つ此の寡婦ハ一旦良人を失へバ終身復た外へ嫁にゆくことを得ざる上世間の人々は痛く之れを賤しみ辱しむる風あり又寡家は最も下等の食物の外旨きものなどハ食ふことを許されず夫れも一日に二度食事を爲すを得ずよし又其家は金持にても總て粧飾物を身に附けるを得ざる上最も下等の着物を着ねばならず寢るにも布團を用ふるを得ずと云へり右の風俗ゆゑ親類一統之れと同等の交際を爲さず病氣にて寢て居る時も誰一人之を憐れまず寡婦は喜びあるも歌ふを得ず笑ふを得ず親類に祝儀事ありても又は町内に祭禮の催しありても獨り引籠り居る由なり右の次第な

るにぞ中には世間の辱しめを受けて人々に侮り賤しめらるゝを怨みて井戸に身を投げて不幸なる最後を遂ぐる者ありと印度の娼妓の一名を寡婦と云へり此の一事を以ても寡婦が印度社會に痛く鄙しまるゝを知るべし此等の弊害ハ大に智識ある印度土人の憤發を起し終に寡婦の改良を目的とする協會を組織して此會社より社會の改良者と云へる新聞紙を發行し之れに依て寡婦の有様を改良せんとするに至れりと因に云ふ印度にてハ十一歳の時良人に別れし寡婦ありと云へど餘程早く婚姻するの風俗なり

（本年十月十一日繪入朝野新聞）

●森文部省御用掛の示諭　本年九月三十日の大日本教育會雜誌に森文部省御用掛の示諭を傳聞すと題して今回東京女子師範學校を東京師範學校に合併せられたるに付き同校監督の書簡及び口諭ありとて記載しあれバ左にこれを抄録す

森御用掛より從來兩校々長高嶺秀夫那珂通世兩氏への書簡

今般男女師範學校を合併せられたる譯ハ專ら管理上と經濟上の點より起り兼ねて此校をして一層善く其職分を盡さしめんとの政府の意に出たり今余之を監督するの重任を負ひ斯の政府の意を貫かんと欲するに方り熟々思ふに抑此師範校ハ主として全國の小學校教員を養成すべき貴重なる府縣立師範學校の教授を擔任すべき者を教成する所の最高の教育學校なるに由り實に教育の本山とも稱すべきなり殊に女教員の養成に至てハ國家の根本を堅固にする諸業の中にて最も重要なるものなれバ更に深く注意を加へざるべからず此學校を整理するとハ國家前途の生活機を取扱ふ所の至大至重の業なり之に當る者ハ心中常に戰兢たらざるを得ず今斯の心を以て前顯政府の意を貫き了らんと欲すれば則先づ此校に於て須らく養成

すべき男女生徒の數と之に相應すべき教員吏員の數を限り而して爲めに要する所の費用の金額を定め尙ほ且つ此金額を適當に使用するの法を立て其資力をして及ぶ丈の活用を爲さしむるに至るべし云々
前文の外尙ほ御配慮を要すべき事項は追て可申進候得共不取敢此趣旨從來の教員吏員へ御傳諭を煩はし候也

○イーストレーキ夫人の演說（前號の續き）

行爲活潑にして心智逞ましき男子ハ自己の才智を感じ自己の行爲を認むる能ハざるの婦人に對して親愛の情を有し同等の伴侶となる能ハざるべし教育ハ人生に品格を與ふる者なり教育ハ各自互に尊敬せしめ又他人の尊敬を得べき者なり人の妻たる者母たる者姉妹たる者其夫其子又ハ其兄弟の言行才學を識別する力を有する時ハ其夫、子、兄弟ハ一層の奮勵心を感起し又其妻、母、姉妹の才智に感じて之を尊敬するの心を起し是より婦人の位置一變して高尙の程度を保つべし此の如くなれバ男女初て眞成の同侶と云ふべきなり姉妹たり妻たるの婦人ハ其兄弟、夫が如何なる生活の進路に向ふにせよ其心を振勵して行を勇奮せしむるの極めて緊要なるを思ふべし母たる婦人ハ兒子と共に自已往日の生活を新たに再見するの狀ある者にて其の智識の大道に沿ひ初歩の教育を助け其學校の復習を指揮して自己が幼年の時に習ひ得たる教科を思ひ出し新たなる感を發れるとあり既にして教育進歩し年々に高度に達して教育の勞減ずるを見れバ母の心中ハ兒子の自修によりて其生長する次の代にハ自己が經過せる先きの代よりハ人智高度を得るの冀望を有して一層の奬勵と愉快とを感ずべし實に教育を受たる婦人にハ驚く可き勢力ある者にて家内に於てハ婦人が統治する王國ありと云ふも過言にあらず其性情を發揚して安全なる場所あり其功

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

名を立つる領地あり故に婦人は政治上に喙を容るゝを要せず會議に參席するを要せず社會の公政に奔走するを要せず而して未來の政治家の心を陶冶するは男子にあらずして婦人に在り訓言と實行とに由て高等の政治家を育成するは男子にあらずして婦人に在りされど婦人も柔軟なる手を以て政治の樞機を握るといふも不可なることなし而して未來の世運は婦人が贊成する一笑と冷待する一顰とによりて決定せらるべし此に列席する婦人は日本社會の後來を組織して世運を左右する者の中に列れり日本國人は日本婦人を取除きては事業を成功する能はず此等の義務は列席婦人の身に屬することを常に忘る可からず列席の婦人は眞理を尋ねざる可からず人生とは如何なる者なるかといへることを正く理會せざる可らず此の一事は御身等を眞智に導く者にて之を缺けば百事皆敗るべし婦人の生活を支配するは無形德義の力に在りて其志行共に此力に感化せらるべきなり是れ實に唯一の眞神と其人類に啓告せる訓戒とを信ずるに在り此の如くなれば御身等の生活を快活にして日進の先途に光明を放射すべきなり今や他日に盛大の日光を發つべき好運の曙光日本婦人の頭上に照れり然れども婦人は攻取に類する行ある可らず自進自修の道による可し智慧、深切、純潔、謙遜により御身等は捷利を先途に得べきけり（をはり）

○夕立　磐城棚倉　鈴木　丸女（十二年三ケ月）

鳴神の聲にあつさをそらわせて
涼しくかゝる夕立の雨

○楊貴妃　東京麻布　稻村　千町

とゞめおきし玉の枕を見るにさへ
露と消えし人ぞ戀しき

○秋月　伊勢員弁　岡　嘉猷

ほの〴〵と夜を明石にて月見かな

○　　西京祇園　ことのは

遜りしは硯の海よ今日の月

○秋日江村得寒屑韻　　明治女學校　百合香

秋雲滲淡雁聲咽。斜日林梢紅未滅。舟在蘆花洲外横。
漁翁不拂滿簑雪。

評　風趣斬新。能學歐北者。

○晏子の御者妻の諌を入れたる事

晏平仲嬰と云へるは齊國よ隱れなき宰相なり或る時外へ出でらるゝに其御者御馬の轡を執り鞭を打振りさも得意なる顔良して御供する景狀を此の御者の妻門の隙より覗き見て我夫の擧動心に適はぬとて其の歸るを待ち夫に云ひけるは其方の身の上かく賤しきこそ理りあれこれを如何と申すにさきほど宰相殿の御出を側かに覗視侍るに三尺にも足り給はぬほどの小男にて御人柄よくもましまさず然れども御名天下に隱れなきは吾こそ大國の宰相にて時を得たると自奢たまふ御景色聊もましまさぬ只だ御愼み深く謙遜りて物と思案し玉ふ御態ひなり然るに其方の生れつきは長ヶ高く健かなる人物にて御馬の口を執り此況狀を羨み望めよと思へるさまにて意氣揚々としたる々しき最と淺ましき心得なり假令ひ天命にて貧賤に生れ會ひたりとも志を立て時に逢はざるは恥づべきことにあらず其方の貧しく賤しきさまは心よりなして之を足れりと思ひ給へるやう見ね侍れば願ひ甲斐なき人なりとて頻りに暇を乞ひければ夫此の理を感じ志を改め過ぎにし方の擧動と俄にかはりたる有樣なりければ晏子怪しみ御者を呼び問はれけるに妻の諌めしをありのまゝに申上げれば晏子申されけるは妻の諌めし辭は比ひなき金言なれば稱美するに余ありさて汝も亦た惡人にはあらざるべし人毎よ誰れも過は有るものなり諌を聞うけて速かに過を改むると奇特なれば二人ともに凡人にあらぬとて夫婦の事備よ齊の君へ申上られければ妻は命婦の号を下されて褒美したまひ夫は大夫の官よなし玉侍けるとなん

〇静御前の舞

源義經の妾静は京師にて名を得たる舞妓なりしが才色をもて義經に寵せられけり義經都を落しとき静は吉野までつきまとひしが其より都へ歸り居しが頼朝鎌倉へめしよせて義經の行衛をとひきけれども吉野より末ハ知らぬよし申そ程にさて放ちかへさるべかりしを義經の子を懷孕してありける程に誕生する迄とてしばらくとめられしがかねて舞曲の藝世にかくれなかりければ頼朝その藝を見ばやとて鶴が岡の祠にてまハせられける静

心うきことに思ひて再三辞しけれどもしゐて命せられしのぞいなみがたくて舞けり頼朝時といひ所がらといひ靜ハ必らず祝歌をこそ唱ふらめと思ひけるにさハなくて　しづやしづし津のをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな又おしかへして　吉野山みねの白雪ふみわけて入にし人のあとぞ戀しきとかなでたれど頼朝怒つて今日の事なれバ時世をぞ祝すべきに叛逆の義經をしたふと奇怪ありとて既に罪にも處せらるべかりしを夫人政子のわび言にて事とたにけり靜ハそれを葉芥ともせぬ程へて都にかへりつゝ一生世に出でず身をかくして終りけりかの草も木もなびきし威に懼れず勢に屈せぬ始終志を立てゝ義經に負かざりしと高館にて殉死せし輩とも兼ね稱むべき者なり

○基督教道徳の歌

このごろ英國の詩宗ウィリヤムカウペルぬしの行路難を讀侍りて感吟のあまりそれにならひてものせるなり　　秋美

うつそみの　ひとのこゝろよ　いかにして
かくれはかなき　ありそうみの　なみふゆらく
うきくさの　ねなきのまゝに　なにはかた
ことのよしあし　しらなみの　よするなきさに
そをつくし　こゝろをいたみ　させはまの
みちゆかはやど　おもひしも　おもひしなへて
けふははや　みるもかひなく　しゐられし
やふれころもの　すべなさに　よらんかたなき
またつみに　ふねなかしたる　こゝちして
ゆくへもいまハ　しらぬひの　つくしのおきに
さゝよへと　おのがちからを　たのみてし
櫂もおれてハ　梶をのみ　あやつるとても
いかてかハ　ゆくてはるけき　みなとへに
いたりつくべき　しかはあれど　くものうへなる

おそみやの　かすみのとばり　ひまもれて
そよとふきくる　あまつかせ　眞帆かうけなば
たとひ身は　千しは八しはか　そめなせし
けかちのふちに　なやむとも　ちのかなしみは
くもときえ　ふりさけ見れは　ひさかたの
みやこのそらは　うれしくも　ふかきのぞみか
てらされて　はれわたりてぞ　みねよけるかな

○文を書く心得　牛込の　井上　そめ

一花の比の文かゝんとならはその心得あるべし其もゑは花はうるはしく盛となるを賞翫すべきにさとなくて雨ようたれ風に乱れ散りて色のうつろふ氣色などをいひやらんとつたなくひくつけき事あるべしされどうしこき人の詞にも花見の文にそ雨風の字だも忌侍るものをよしなく書きちらし侍らんは書ぬこそまさりて覺ゆれといへり

一文の返事はまづ先方の無事を悦こび次に我方の異りなき様子を書てそれより用事の品と書いだすべし用事の品をいひやらんにも詞の前後せざるやう斷のよく聞ゆるやうに書べし詞つゞき前後すれど文字のはこび乱れ糸の如く斷り聞へど同じ事ながらくりかへしうきつらねんはつたなかるべしさればこそ下子の詞とて文詞餘りしたりと清少納言もいへり

一我が留守の折から相知れる人の訪ひ來る事あらば早速文つかはしてかさじゞなき様子をいひやるべしその人に頼みおきける事などあらば尚更のとなりとづから參りてその訣を斷り侍るべし我より下ざまなる人は各別同輩の人ならば我方に用事しげくとも召寄侍らんと大に無禮なり扨又た女文に夜前昨夜などゝ書んは男文に似て餘り強らし夕もとも夕べとも書べし去し夜すたりし夜などゝ書は同じ事ながら遊女めきて惡しゝ

（未了）

○娘と姫の辨

俗間に處女を稱して娘といふ婦女の尊稱なり天子ハ母后を稱し宮人ハ皇后を稱して娘と曰ふ唐の平陽公主の軍を娘子軍といふが如き之なり故に母を孃といひ穩婆を老娘といひ女巫を師娘といふ類皆な女を貴ぶの稱なり然れバ處女を娘といふハ誤りなるべし按ずるに孃の字を娘に誤ちたるならん說文に孃ハ女良切とありしより女良を合せて娘と書し暗に尊稱の娘と符合せしなるべし故に古ハ娘の音をジヨウといひし後にはヂヤウといへり但し說話にハ猶ホ女子をジヤウといへり○ヒメハ婦女の尊稱なり大靈女貴比賣神等にて知るべし此に姫の字を當てたるハ只周の代に姫ハ女子の尊稱となるに由る周ハ姫姓なれバ王の女を皆な王姫といへり其他の代にハ宋の蔡京といふ人公主を改めて帝姫となせしより外多くハ尊稱にあらず愛姫寵姫ハ氣に入りの妾なり粉姫黛姫ハ化粧せる女にて白拍子の類なり是に由ればヒメに姫を用うるハ穩當ならず宜く娘の字を用うべし

○五常の程

紀伊中納言治貞卿といへるは西條侯より本家をつぎ玉ひて明和の頃ろ紀州侯肥後侯とて兩賢人と世の人尊みし御方なりその言ふ云く

仁が過れバよはくなる　義が過れバかたくなる
禮が過れば諂ひとなる　智が過れバうそを付く
信が過れバそんをする
氣ながく勤はかたく色うすく
食ほそうして心ひろかれ

○女房どもの風俗

女房どもの風俗を御覽じへむかしも今も武士の妻女ハ風俗まやんとして小袖の裾はやらく〳〵せぬやうに針にてさだて歩行さへあるに町の女房どもハわざと裾のひるがへるやうにして脛の白いを見せかけ仙人

を落して見せ物にせん方便と見ゆるより此心底尤もにくらしく存じまた首筋の白きを見せたきか衿の穢れぬ仕末の退衣紋にして中將姫が雲雀山で敷皮に乘り覺悟仕やつた樣に前へ首を投たれ見らる紅の襦袢が見せたさなのもふもあいあたまをめつたに釵でかくのも參る其外腰帶の結目は脇にこそあらめ脊筋の長强のあたりにむすぶもありさりとてはおとなしからぬ風俗なの形では心の正しからぬは理なり形は心の表事にておのれが心を表へあらはし武家の女に嘲らるゝもまらぬまた近ごろ各樣の前で餘りというりな申事なれど惣体なの女子の褌はとても他人に見すべきものならねば小短ふ漸く三里れすあし下までも極て夫ゆゑ脚夫の二幅のと申よし巫女どもが申を承りおきしそれに此ごろ町の女房は紅緋縮緬は勿論はなはだしきは纈鹿子など入て前にも申通り小袖の前をひらくさするは畢竟このふんどし見てくれにていはんがさりとてはさもしき心底武家がるは末々端女までさやうのむさきものをば人の目にうゝらぬやうにいたすこれが本の女子のたしなみそれに踵より裳裾下へ引ずるほどにすること一向濟穢ものともおもはぬそふあり女子の二布は長いやと下品の人じやといひきかせる親もないうと見ればしかも母親も一段滿足そふで自慢らしく娘と同道で我々が社頭へもはゞからずふんどしを見せかけしはいやとや慮外千萬なやつらそれほど下おびが貴くば向後小袖の上に仕なれと申付たし(積下手談)

○歌澤家の發起　三五舍二八　投

元來端唄の發起は何節より別派したるや其の原因を探り得難きにやあれど昔の催馬樂は土地の流行唄なりしを集めて粱塵秒といへり是則ち端唄なり其後ち今樣大いに行はれて世に聞えたる高名家の秀作多し慶長年間に至りて泉州堺の顯本寺の住僧隆達坊端唄

を好める處より還俗して在家の聟となり其後ち端唄の一風を唄ひ起せしより世に廣く行ハれ其の文句松の葉松の落葉殘りぬ又た元祿年中大石義雄が自畫賛に「君が山谷に草ふかけれど」の唱歌の説もひあれたり實に端唄ハ往古より唄ひ傳へたる者なり近世安政の初め舊幕旗本の隱居笹本某が一流を立つるの念を發せり此の人長唄一中節を熟練し就中此の端唄に刻を得て諸曲の中より妙節を撰拔し新手を加へ端唄としゝる笹本氏の新調數種あり其頃ろ江戸橘町の住平田寅右衛門とて常に笹本方へ出入りやはり端唄を好みしに此の者自然に端唄の備ハりたるにや音律殊に節の諷ひ廻し絶妙にして此の寅右衛門の右に出づる者なく故に笹本氏も自分家元たらんも上への聞へを憚りれバとて則ち平田寅右衛門をして端唄の家元とし始めて歌澤節と號す夫より歌澤の名取陸續さり今の歌澤美知とて寅右衛門の女子二代目を繼ぎて家元の頭取たり(端唄大全)

○常磐津譜節の起原

そも常磐津譜節ハ薩摩浄雲が流末なる文彌節と一中節の兩派より出でたるものにして寶永の年間宮古路豊後掾の時に至り京都寺町の佛師土岐左衛門(元來江州土岐某の男幼名總吉後に庄吉と稱す)と云へる者幼年より浄瑠璃を好み此の豊後掾に隨身し初名を宮古路右膳豊中と名乘しが又た文字太夫と改め竟に師家の嗣子となり享保十九年師の豊後掾と俱に江戸に下り兩國尾上町に住居し後ち石町又ハ檜物町に轉居すと云へり同く二十年の正月初めて中村勘三郎座の劇場を出勤たる後ち事故ありて宮古路の曲節禁止せられしかバ延享四年その流名を改め關東文字大夫と云ひしかど關東の文字倚禁じられたるより更に常磐津と改め一派の譜節を語り出して方今も世に甚だ賞せられき(關扉通解)

因に云く江戸根元集に常磐津の名ハ當時此の節の脇語り志妻太夫造酒太夫等常磐橋の邊に住居けれバ歸らで此の地名に思ひ寄りて常磐津と改めしと見えたり又た一說に師の豐後掾が苗氏石津の二字を其の流名の中に含包て常磐津と稱すと云へり且つ文字太夫ハ文彌節の元祖伊藤出羽掾が血統の曾孫なれバ其の徽章に庵木瓜を用ゐしに後これを畧して角木瓜に換たりと云へり

○源氏物語の評

源氏物語のはじめに桐壺のみかどといふ帝あり更衣の女官を寵愛し賜ひその腹に皇子出生す是を光源氏といふその母はやく死去す帝哀みに堪ねぞその心の慰めに帝の姪なりし姪宮を中宮として藤壺に住せらる是伯父にて姪を妻とするなり光源氏藤壺の宮に密通す是繼母に通ずるなりその藤壺の腹に光源氏の子出來たり帝この事を知らずして我子としたまへり後に帝崩じて光源氏の子位に即たり是を冷泉院といふ右の如く伯父にして姪を妻とし子として繼母に密通し臣としてわが子を帝位につけこれらの非禮不義亂逆もし實事にてその事蹟を記すならぞ是非よれよバぞ素より無きことを設けてつくるならバ右の如き非禮不義亂逆のことを作らぞとも人倫の道に背かざる好色のものがたりいかやうにもおもしろく作りやうはあるべきなり歌學者流は源氏物語を聖經賢傳の如くに貴べどもあしき作りやうの物語なり女のつくりたるものがたりなれバ咎るにおよばざれど紫式部ハ文才もありて菽麥を辨ずるやその智もありしなれバこれを咎るなりと安齋說なり

○神童秀才の話

蒲衣八才にして舜の師たり皐子五歲にして禹の佐るり伯益五才にして火を掌どり項索七才にして孔子の師となる王元澤五六才の時人その才を試めさんとて

獐と鹿とを一つにおしいづれか鹿にていづれが獐ぞ足下知れりやと問ふ元澤さらに弁まへねど速智なる稚兒なれバ鹿のほとりなるハ獐にて獐のそばなるハ鹿と答ふまた孔融と云ふ稚兒あり李膺が許へ到りしとき其座の人々孔融が幼なくて才あるをしむく稱しけるを大中大夫陳韙と云ふもの傍に居りて譏りて云ふ凡そ幼稚にして才ある者ハ年たちて必らず愚となる理ありと孔融とみに顧りみてその言葉の如くならバ君が幼稚に在しときハさぞ才智の在したらめと云ハれて陳韙ハ舌をまきよしなきことを云ひ出でゝ辱をうけたりと心に悔みたりとなん此他伯樂天の如き生れて七月なるときよく之無の二字を識り用明帝の皇子廐戸は生れながらにしてよく言いふ類あまたあり但ぐ後に至りて其の割に名を見ハす者すくなくて十に神童十五に才子二十をすぐれバ並の人との諺まであるハ必竟人々の傷めそやしよりをごり初めて進みを止むるもゑなるべし父母たる者ハよくつゝしみて敎そだて天稟の英才を發達せしむべきことにてそ

○婦女子の心得　遠江　樂聖庵

總て婦女子は心の狹き者多くして動もすれバ些細なる事にも人の過を見出し纔かばかりの失禮をも咎めんとし人の繁昌あるを嫉み僅かに人に辱しめらるゝとも永き月日を經れバ忘るべき筈なるに深く是を心底に含み時もあれバその意趣を返さんとするなどの風あり如何にも賤しむべく又惡むべき擧動なり心の廣き人ハ左にあらず他人の失禮あると見て之を心に止めず或は時として怒ることあるも忽ち之を忘れて痕なく我身に不幸なるも人の繁昌を見ては之を悦び事を爲すにも他人と爭ひ競はざるには非ざれどもその爭ふも自然と賤しからず人の心を察して一々その擧動を咎めず或は粗忽にして罪を犯し我身に害の及ぶとありとも其罪を赦して問はず人の身分に賤しくとも

その心正しけれど之を敬ひ人を叱るも人を惡むとなし之を大量の德といふ故に婦人たりとも唯容色藝能も人に過るともその器量狹少なれば貴人富家の夫人主婦とはなる能はじ勉めて其量を大きく持ち些少の事に心を動し驚かぬやう心掛くべし去ればとて唯ぶ何事も緩慢にして取締り無き樣にするには非ず是は人に接する上のことにて家產を治むることにはあらざればば世の婦人達爾か心得置きたまへかし

○泥中の蓮花

貝原先生京都に遊學のとき未だ年若くおはしければをり〳〵は嶋原の青樓に遊び玉ひ小紫となん呼べる遊君になじみ重ねられしが年たちて歸國のとき小紫わかれを惜しみ己が姿を畫に寫して

姿こそ繪には寫せど中〳〵に
　通ふこゝろは筆にはよばじ

と一首の歌を書て送らんとす姉女郎吉野も是を見て先生はよのつねの人にあらず自らも一首おくらんとて畫の上に

玉琴のひく手あまたの浮女にまことありと心を盡す人こそあはれなれ又をこのしすべて男ほど淺くしき者はあらじと我のみ思ふかもしらずいにしへの佛刀自靜なんど申すとなしといへんもやぶらしまとあだし野の露きえなんいのちわれもしらず人もしらず遊べゝあそべ西へひがしへ

いくたりの目にしほこぼす糸櫻　よし野

貝原氏によする

此よし野は容姿美麗しく風月の才に富み殊に佛道にきゑしてかりそめにもあしき心を持たず年經て後ち剃髮して覺法と名を改め桂川の邊り蓬生といふ處に閑居して世をおくりしとなん

○昔しの嫁入り

元龜の頃には高祿の武士の妻女も乘ものに乘るとなく嫁入の時も麻のかつぎを着て負木と云ものに尻掛てうしろざまに負はれて行けるよし(古老說)

●鶴龜松竹梅の答(一)　鶴龜を賞すると古今集あるも見ゆるは其風習久し松竹も然り梅を吉事に云とはふるくみえず梅はふるく烏梅とかく音あり訓あらず烏梅とは藥品に烏乾たる實を舶來したるが始めにて後に其樹を渡りたるあり花を賞すると天平年間山上億良の集に大宰帥大伴旅人卿の宅にて梅花宴をなし歌によみたるを始めとし王仁の歌此花と云ふも櫻のとなり松も子の日又七種のいはひとて正月の吉事に移しうゑたるより門前に立ることゝもなれり門松のことも兼好のつれ〳〵草に見えたり其頃よりもしられたり凡て鶴龜松竹梅等は其壽命を長く保つ故に祝ひ用ひらるなり(東京、石原とく)

●觀月の問(十八)　同じ月なるに特り八月十五夜の月を賞するは何故なるや(越前、金山野史)

●女學者の問(十九)　現今我國にて高名なる女學者の姓名を御教示あらんことを乞ふ(下總、田邊秋子)

報告

東京大學文學部長外山正一文部省御用掛大槻文彥兩君序●東京大學理學部教授東京物理學校長寺尾壽君跋●日本傍聽筆記學會創立員速記法研究會員林茂淳君編著

早書き取りの仕方　全壹冊

正價郵税トモ金二十四錢

この書は講義演説談話などすべて人の耳にきくがまゝ少しも違はぬ樣に書き取る仕方をやさしく説き明しあるものなり請ふ女學生諸君の速に購讀あらんことを

發兌　東京日本橋區馬喰町二丁目壹番地　石川治兵衛

賣捌　東京芝區西の久保櫻川町八番地　萬春堂書房

東京教育新誌拔出

文章軌範講義錄　卷之一　賣價三拾錢郵税六錢

東京教育新誌　一枚二錢十枚前金十九錢郵税一枚一錢宛

東京芝源助町十一番地　東京教育新誌本局　傳習社

同芝區西ノ久保櫻川町　大賣捌所　萬春堂

日本婦人改良論の點取文も粗ぼ甲乙丙の調査相濟候得共編輯上の都合に依り第八號の紙上へ掲錄することに可致候間投寄者諸君左樣御承知可被下候以上

文學叢誌女學雜誌本局

萬春堂編輯係

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

前金滯りの看客に告ぐ

弊堂女學雜誌看客中御注文御入金の報のみ有りて未だ御送金なき諸君二十餘名あり右ハ夫々御催促狀差出し候得共今以て御廻金なき向も有之甚以て迷惑の次第に付き本月中に御沙汰なき分ハ不得止前号報告通りの取計らひに可及候間左樣御承知有之度此段更に報告す

十月廿五日

萬春堂會計係

賣捌所の看客諸君に告ぐ

弊堂女學雜誌文學叢誌共都合に依り賣捌所へハ發送差止め候事も有之可申候間其節ハ直に弊堂へ御注文被下度早速御申越の雜誌御送付可仕候此段報告す

十月廿五日

萬春堂發送係

文學叢誌發行の報告

文學雜誌ハ都合に依り文學叢誌と改題仕出願候處去る十六日御許可の御指令相下り候に付き即日第壹號發行仕候何卒女學雜誌同樣御贊成御愛顧の程偏に奉希上候也但し目錄ハ前號掲載の通り見本ハ六錢封入の事　萬春堂敬白

前金ハ可成郵便爲替又ハ通運便を以て御送付相成度實際不便の地に限り壹錢郵便切手壹割増にて申受候

大庭宗吉編輯　近藤賢三校閲

● 女子學藝問答　附金言集　全一冊美本正價郵税共二拾五錢　近刻

此書ハ婦女子に緊要ある女學女藝の問答數百種を集め加之古今女訓の金言數十章を附記したる婦女子必讀の好冊子なり御申込の諸君へは出來次第御送付可仕候間至急御注文可被下候

萬春堂書房

詩文添削　詳細本誌三號ニアリ

東京麻布谷町卅八番地　梅花吟盧

發行所　東京芝區西ノ久保櫻川町八番地　萬春堂

持主兼印刷人　大庭宗吉

編輯人　近藤賢三

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町	巖々堂
同　神田區雉子町	團々社
同　日本橋區新葭町	長明堂
同　日本橋區馬喰町二丁目	自由堂
同　京橋區木挽町一丁目	萬字堂
同　京橋區銀座二丁目	山口福松
同　牛込區肴町	活神堂
愛知縣名古屋本町二丁目	石版社
岐阜縣美濃國笹土居町	星菱書房
越後國長岡	大橋書房
大坂備後町四丁目	岡島支店
大坂西區江戸堀南通一丁目	旭香舍